

ギャルが妻と娘を亡くした男と出会い、
心の視野が広がっていく話

夜が明けると、
新しい風が肺を満たして

脚本 原田純愛

登場人物

安藤夏子（16）SNSで人気の女子高生。白に近い金髪で、化粧は濃い。爪も尖ったつけ爪をしている。

鷹田隆浩（32）バスツアーの転落事故で嫁と娘を失った。真面目で根暗。物腰は柔らかか。

夏子父（40）感情的になってしまうタイプ。気持ちとはよそに、キツイ言い方をしてしまう。

夏子母（40）

友だち

○パソコン画面

パソコン画面にユーチューブの画面。動画が映り、音楽に合わせて、五秒程度で次の動画へどんどん切り替わっていく。

最後に転落事故の動画が十秒程流れ、泣いている隆浩が映し出される。テロップに『先週起きたバスツアー転落事故』『一人の遺体が発見され』『妻と娘を亡くした鷹田隆浩』の文字がクロージアアップされる。

ユーチューブのタブがカーソルによって消される。

ツイッターの画面が映り、縦にスクロールしていく。

夏子がダンスしている動画で画面は止まり、自動再生されると『いいね』が増える一方で悪意あるコメントが徐々につき始める。「かわいくない」「デブじゃない?」「ナルシストっぽい」など心無いコメント)

夏子の声だけ「死んだらいいのに」画面にコーヒーがかかる。

○夏子の家、リビング(夜)

リビングテーブルでノートパソコンを触る夏子(16)。すっぴん、ヘッドフォン、ジャージ姿。

母(40)キッチンで皿を拭いている。

父(40) 夏子の隣にマグカップを持って立っている。

夏子「えっ！ えー！」

夏子、ヘッドフォンを外し、立ち上がる。

夏子「ちょっと！ なにすんのよ！」

夏子、父をにらみつける。
母、間に入ろうとするも、父に手で制
される。

父 「汚い言葉を遣うんじゃないと言ってる
だろう。言葉は人となりを表す。ちゃんと
した美しい日本語を使いなさい」

夏子 「あーもううざりたい！ その言葉、耳
にタコができるくらい聞いたってば！ 大
体、人のパソコンにコーヒーかける人が、
言葉遣いにどうこう言えるワケ？」

父 「それは……。とにかく、死んだらいい
なんて安易に口にだすもんじゃない。ネッ
トが悪影響を与えているんならこれを機に
離れなさい」

夏子 「意味わかんない！」

父 「昔はあんなに心優しくて、人の痛みが
わかる子だったのに」

夏子 「じゃあ、パパの育て方が悪いんじゃない
い！」

母 「なっちゃん！ パパも、本当のことを
言えばいいじゃない！」

父、テーブルの上にある夏子のスマホ
を奪おうとする。

が夏子が気付いて奪い去る。

夏子 「パパなんか大嫌い！」

夏子、自分の部屋に移動。

手あたり次第ショルダーバッグに詰め
込むと、玄関に。

玄関にはパパ大好きと描かれた絵。

母、追いかけようとするが夏子は捕ま
れた手を振りほどいて出て行ってしま
う。

○マンション出入口

夏子 「あームカつく。あのパソコンに入っ
てる編集ソフト、いくらだと思ってんの！

最近、ホント、口うるさすぎ！ 更年期障害なんじゃないの！」

夏子「（自動ドアに映る自分を見る）うわ。すっぴんで出てきちゃったし！ 最悪！」

階段を降りたところで、フラフラした

隆浩（32）とぶつかる。（黒のスー

ツ、動画で映った服装と同じ。くたび

れて、無精ひげ、髪はボサボサ）

隆浩、尻もちをつく。夏子、舌打ち。

夏子「汚えオッサン」

隆浩、よろよろと立ち上がり、夏子、

閃いたような表情をする。

夏子「ねえねえ、オッサン」

隆浩立ち止まる。

夏子「ぶつかったんだから慰謝料ちょうだいよ！」

隆浩、尻ポケットから財布を出してそのまま渡す。

夏子「えっ！」

隆浩「次からは知らないおじさんに声掛けち

やダメですよ。親御さんが心配します」

慌てて中身を確認する夏子。

札束がたくさん入っており、免許証に

気付き、名前を読み上げる。

隆浩、トボトボと歩いていく。

夏子「ん？ なんか、どっかで聞いたことあるような……。ま、いつか」

夏子、隆浩とは逆の方向へ歩き始めるが、すぐに立ち止まる。

× × ×

事故後の映像と、涙を流す隆浩の映像が流れる。

× × ×

夏子「ちよつとまって、あの先、橋！」

夏子走り出す。

○橋の上

下に川が流れている。

柵の向こう側に立つ隆浩。

息を切らす夏子。

夏子「ちよちよっと待って！ オッサン！」

隆浩「……」

夏子「月並みだけど、死ぬな！」

隆浩「……疲れたんです」

夏子「生きてりゃ、良いことあるからさあ！」

隆浩「私だけ生きていても意味なんかありません。妻も娘も失ってこれから先、どんな良いことがあるっていうんですか」

夏子「そんなのアタシにもわかんないけどさあ。でも世の中おもしろいものとか、時間を忘れられるほど楽しいものってたくさんあるじゃん。ゲームとか、映画とかさ。時間が悲しみを癒すってやつ？ あー、もうとにかく目の前で死のうとするのやめてよ！」

隆浩「……あなたが家に帰ればいいじゃないですか」

夏子「（臆する様子なく近寄る）とにかくさあ。コレは返すよ。今はまだいろいろ辛いかもしれないけど、とりま、ユーチューブでも観ればいいんじゃない？ くだらない動画も多いけどさ、自動再生で適当に観たらそれなりに笑えるやつもあるよ」

隆浩「あなたって、見た目に反して真面目な人ですね。私なんか見ないふりして、黙ってお金をもらっておけばよかったのに。」

……それでその、ユーチューブって……おもしろいんですか？」

夏子「うん！ うんうん！ おもしろい！ おもしろいのいっぱいあるから！ アタシが教えてあげるよ。だから飛び降りるなんてやめな！」

○隆浩の家

いたるところに娘の絵が飾ってある。

玄関に女性ものの靴と、娘の靴。

流し台にコップが三つ。全体的に乱れて、埃っぽいダイニング。

夏子「お、おじゃまします」

隆浩、すたすたと部屋に入っていくノートパソコンを、ソファ前のローテーブルに置く。

隆浩「これで、ユーチューブが観れるんですよね？」

夏子「そうだよ。観たことないの？」

隆浩「観ているのを見たことはありません」

夏子「へー」

隆浩「妻と娘がよく観ていたんです」

夏子、気まずそうな表情でソファに腰かけ、ノートパソコンを開く。

デスクトップには娘と妻の笑ってる画像。

隆浩、キッチンから戻ってくると、ローテーブルにウイスキーと氷の入ったグラスを置く。

隆浩「使い方を教えてくれたら帰っていいですよ。親御さん、心配しているでしょうし」

夏子「ウチの親のことはいいの。喧嘩して出てきたところなんだから」

隆浩「それならなおさら、心配しているでしょう。こんな知らない男の家に勝手に上がって」

夏子「……なにか間違いでもあるっていうわけ？」

隆浩「ありえませんが。男性として機能しないので」

夏子「えっ！ インッ……ED ってこと？」

隆浩「……」

と、ウイスキーをグラスに注ぐとすすむ。

夏子「ストップ、ストップ。じゃあなおさらお酒なんかダメじゃん。(ウイスキーのボ

トルを取り上げて、遠ざける) ちよっとま
ってて、アタシがユーチューブの流儀って
やつを教えてあげるわ。とりあえず、お金
ちょうだい」

隆浩「……流儀？」

隆浩、財布ごと渡すが、夏子はそこか
ら一万円取り出す。

夏子「ちよっとまってる」

お札を握りしめ、部屋を出ていく夏子。
戻ってくると両手いっぱいコンビニ
の袋を持っている。

夏子「は〜重かった。(袋から中身を出し、
おつりも返す) まず、ポテチでしょ、で、
絶対コーラは外せない。そしたらポップコ
ーンの塩気があるでしょ、で、チョコも。
甘いもの食べたら、しょっぱいものがほし
くなる。無限ループってマジ怖いよね。あ、
キッチン借りていい？ ピザ温めるから」

隆浩「……いいですよ」

夏子「っと、その前に、窓開けていい？ な
んか埃っぽくってさあ。(返事も待たず窓
を開ける) やっぱり、新しい風を取り入れ
ないと」

隆浩「……家に帰らなくていいんですか？

親御さん、心配していますよ」

夏子「わかってるって、動画観たら帰るよ」

暗転

二人、肩を並べてノートパソコンの画
面を見つめる。

動画が BGM。

夏子「ねえ、どうやって結婚したの？」

隆浩「どういうことですか？」

夏子「あたし、恋したことないから。そうい
うの、全然想像できないんだ。だから、興
味があつて。なれそめとか聞きたい」

隆浩「真理子……あ、妻の名前なんですが。

彼女と大学で出会って、告白して……。奇
跡的に付き合えたんです。誰からも好かれ

るマドンナ的存在でしたから。私にとって高嶺の花でした。彼女を独占したくて、繋ぎ止めたいと思っただけです」

夏子「うわ。じゃあ、既成事実ってやつ〜？」

隆浩「まあ、ありていに言えばそうなります」

夏子「わかるわ。奥さん美人だもんね」

隆浩「性格もいいんです」

夏子「惚気！」

隆浩「今思えば、伝えたりないくらい愛していました。娘は里奈って言うんです。来年少生なんです。絵が大好きで、びっくりするほど聞き分けのいい子なんです」

夏子「かわいいね」

隆浩「でしょう。出産にも立ち会ったんですよ。初めて抱きしめたときの感動はいまでも覚えています。私たちの子なんだって思うと胸がジーンとしました。胸の奥から愛おしさが湧き上がってくる感覚を教えてくださいました、里奈は」

夏子「……」

隆浩「でもね、いまさら言葉でならどうでも言えるんですよ。実際の私は、仕事人間でした。二人はよく、この動画サイトを見ていましたが私は興味を示さなかった。いや、本当は二人に興味がなかったのかもしれない。愛してるや、愛おしいだなんて笑わせる……。だってあの事故の日、私は家族旅行よりも仕事を優先したんですから……。私も、私もあの時一緒に行っていたらば……」

夏子「オッサン！ 自分を責めるのはやめなよ。オッサンは二人のことをちゃんと愛してたよ。今はショックで、気が動転してるだけ。じゃなきゃ、娘はパパの絵なんか描かないって」

隆浩「……あなたも昔、父親の似顔絵を描きましたか？」

夏子「……（口調をマネて）描きましたよ？」

二人の間に沈黙が流れる。

隆浩「この動画、すごいですね。五億回再生されてるんですか」

夏子「そうだね。結構ざらにあるよ」

隆浩「(眩き) ……真理子や里奈もこの動画を観たんだろうか」

夏子、なにかひらめいたかのように身を乗り出す。

夏子「そうだ！ オッサン、落ち着いたらユ―チューバーになりなよ！」

隆浩「どうしてそうなるんですか」

夏子「だって、バズったらさ、奥さんや娘さん、観てくれるかもしれないよ。元氣そくなオッサンの姿観たらきつとよろこぶよ」

隆浩「…:あなたは優しいんですね。私の話に合わせてくれる」

夏子「そんなことないって。さっきだって、パパと言い合いになって『昔はあんなに心優しく、人の痛みがわかる子だったのに』って言われてさ、あたしは『パパの育てかたが悪いんじゃない!』って言ってやったもん」

隆浩「それはなんとも…:泣けますね」

夏子「だってむかつくんだもん。ノートパソコンにコーヒーかけられたんだよ？」

隆浩「どうしてそうなったんですか？ ちゃんと話し合いましたか？」

夏子「どうしてって、そりゃあ…:。まあ、話し合っていないけど…:」

隆浩「だめですよ。ちゃんと納得するまで話し合わないよ。家族なんですから」

夏子「まあ…:オッサンがそう言うなら、話し合ってみるけど…:。と、とにかく！ オッサン！ ユ―チューバーデビューしなよ！ あ、なに系でいくかとかも決めないとだよね」

隆浩「…:なに系？」

夏子「客層？ っていうの。動画観てくれる人たちを想定するんだよ！」

隆浩「へー、みんないろいろ考えているんですね。でも、そうですね。もしやるなら子

どもむけがいいですね。里奈もみてくれる
かもしれないし」

夏子「いいじゃん！ いいじゃん！ 子ども
向けに日本語教室とかやったらいいんじゃない？
オッサン、口調がバカていねいだ
しさ！ 顔出しはく…なしにして、あ、
あの祭りのお面（壁に飾ってある幼児向け
のお面を指さす）とかつけよう！ メイン
カラーとかはね、オレンジか赤がおすす
め！ 小さい子の男女が受け入れやすい色
なんだって！」

夏子楽しそうに話し続け、隆浩はうん
うんとうなずく。

窓の外が明るくなっていく。

暗転。

○早朝の公園（早朝）

夏子「じゃあね。もう変な気おこすなよ」

隆浩「ありがとうございます。少し、元気が
出ました」

夏子「ユーチューバーデビュー、楽しみにし
てる」

隆浩「はは…：…そうなればいいですね。でも、
未来の話をするのは、なんだかいいもので
すね」

夏子「あはは、よかった。じゃあ、ほんとに、
こいで」

夏子、振り返ると、息を切らした父が
立っている。

父 「夏子！（隆浩を見る）きさま！ ど
このどいつだ！」

夏子「ちよ、ちよっと！ パパ誤解だつて」
隆浩「あ、あの」

父 「いい大人が、女子高生に手を出して！
恥ずかしいとは思わんのか！」

夏子「だから違うってば！」

夏子父に引きずられ、家へ戻る。

○夏子の家、ダイニング（朝）

夏子と父はテーブルに向かい合って座っている。

母はパジャマ姿で、お茶を淹れている。

父 「いったい、どういうことなんだ。こんな時間まで外をほっつき歩いて」

夏子 「……ごめんなさい」

父 「えっ……」

夏子 「だからごめんなさいって言ってるの！」

父 「（うろたえながら）大体、あの男はなんだ？ その、彼の氏か？」

夏子、リモコンを手に取り、ニュース番組をつける。

夏子 「この人、さっきのオッサン」

父 「えっ……」

夏子 「オッサンが、川に身を投げようとしたのを止めたの。それで、一晩話して……」

あたし、頭悪いなりに想像した。自分のこととか、パパや、ママのことも。——好き

な人ができて、結婚して、それから子供ができて……。それが二人にとって、あたし

ってことなんですよ。パパがどうしてあたしを怒るのか、とか、いろいろ考えたよ。

結論、『親むかつく！』だけで切り離しちゃいけないんだろうなって……思った。パ

パはずっと一貫してたよね。悪いことは悪いっていうし、良いことしたらほめてくれ

るし。最近パパが怒ってばかりなのは、あたしが悪いことしてたからなんだよね」

父 「夏子……」

母がお盆をもってやってくる。

三人分のお茶を置く。

母 「パパ、夏子が謝ったのよ。次はパパの

番じゃない？」

夏子 「え？ パパの？」

父 「……悪かった。コーヒーかけたのはわざとじゃないんだ。夏子が『死んだらいい』

だなんて言うから驚いて手を滑らせた」

夏子「そうだったんだ」

母「私たち親だつて間違えるのよ」

夏子「そうだよね……」

三人とも、テレビの隆浩へ視線を移す。

父「この人は気の毒だったな。もしも、俺が同じ立場だったらと思うと胸が痛い。さつきは、何も知らずひどいことを言ったな」

夏子「……」

父「夏子はこの人の自殺を止めたんだな。えらいな」

夏子「どうだろ。あたし、止められたのかな」

○都会、昼

スーツ姿の夏子、友だちと歩く。

友「夏子さー、ホント急に変わったよね」

夏子「いやいや、この時期、みんな変わるじゃん。就活で髪暗くしてさ」

友「そうだけど。なんていうか、こう……SNSもすっかりやめちゃってさ。落ち着いたっていうか。大人になったっていうか？」

夏子「そうかな。化粧変えたからかな」

友「あ！ それあるかも！ もともと化粧落としたら誰かわからないもんね」

夏子「こら！ それはアンタも同じじゃん！」

夏子、足を止める。

スクリーンに映し出される、仮面をつけたユーチューバーの動画に釘付けになる。オレンジ色の服をきている。

友「あー最近、このユーチューバー人気だよね。児童向けの正しい日本語講座の人だっけ」

夏子「そう、なんだ」

友「そうそう、すごいんだよ。穏やかな口調なのに、ときどき抜けててさ。それがなんかかわいいんだよね。奥様方にも人気らしいよ！」

夏子「へー……」

歩き出そうとしたとき「あの！」と声をかけられる。

振り返ると隆浩が立っている。

隆浩「すみません！ 突然声をかけてしまつて……！」

夏子「……」

隆浩「私たち、お会いしたことありませんか？
知り合いに、雰囲気似ていて……」

友「やだ、夏子、ナンパ？ 無視して行く
う？」

夏子「(友だちを見ずピースを作る) オッサ
ン！ やればできるじゃん！」